

## 『仏頭ばす』

ここ数年、ひとりで首を傾げていることがある。いいのか悪いのか、いくら考えてもよくわからないのだけれど、すごく愉快なことなので書いてしまう。

私が通勤に使っている路線バスから見える駐車場に、小型のバスが二台、収まっている。それが、ものすごく派手なバスなのである。車体は鮮やかな青空色で、側面には花やら小鳥やら楽しげなものがいっぱい描かれている。その程度なら何も驚くことはないが、屋上には低い囲い、というか手摺りのようなものがついていて、その中に大きな人間の首が三つ、四つ、思い思いの方向を向いて置かれているのである。目をつぶって瞑想しているような顔もあれば、薄目を開けて微笑んでいるものもありで、まるで露天風呂に首までつかつてのんびりしている人々みたいに見える。

さらに強烈なのは、運転席の上に乗りに出している顔だ。もじゃもじゃの頭の上には丸い飾りをいただき、こどもらしい明るい表情でカッと前方を見据えている。これには肩もあって、両腕をさっそうと後に伸ばしてる。ちょうど、こどものスーパーマンが空を飛んでいるような感じである。

正面のガラス窓の下には大きな字で「仏頭ばす」と書いてある。ひらがなで書いてあるところを見ると、幼稚園の送迎バスなのだろう。

ある日のこと、バスで乗り合わせた高校生が、その派手な小型バスを見て大声を上げた。

「おい、あれ見ろよ、すっげーな」

「ねえ、あれって、もしかして、ぶっ飛ばすって読むんじゃないかねえの？」

「ああ、そうだそうだ、ぜったいそうだよ、ぶっ飛ばすだよ。うわー、すっげえー！」

高校生たちは大はしゃぎである。私も内心にたりと笑った。かねがね思っていたとおりだったからである。

その「仏頭ばす」の隣りにいるのが、これまた印象的なバスで、屋上には巨大な魚が楽しげに身をくねらしている。名づけて「ぶらつくばす」という。ブ

## 『仏頭ばす』

ラックバスといえ、釣り人が湖に放ったために在来の魚をみんな食べてしまったという乱暴者ではないか。

思うに、この幼稚園の園長さんは、たぶん仏教のどこかの宗派の和尚さんなのだろうけど、とてもユーモアのある人なのにちがいない。しかし、ちいさい子どもの教育という見地からして、これは問題はないのだろうか。私はひとり悶々と悩んでいたのだった。

でも私は思うのである。このバス、私でさえ停まっているのを眺めるだけで何だか晴れやかな気分になるのだから、向こうから自分を迎えにやってきたのを見た園児たちは、どんなにうれしたことだろう。喜び勇んで乗り込み、幼稚園に通うにちがいない。「行くのやだー」などと言う子はひとりもないはずだ。それに、辻々で止まっては幼児を拾っていく通園バスなのだから、名前はどうか、道路をぶっ飛ばす心配はない。

あのスーパーマンのような顔に日々親しんだ子どもたちは、無意識のうちに、仏さまというのはすごかわいくて、空をびゅーんと飛べるのだと思って育つかもしれない。それが仏教の教理に則して正しいのかどうか、私にはわからないけれども、そんなふうにして宗教心を身につけるのも悪いことではないという気もする。少なくとも仏教の幼稚園としては、へたに押しつけがましいよりずっと効果のある、巧妙な指導だと言すべきだろう。

それにしても、ぶっ飛ばすとはねえ。

本文初出：北国新聞「北風抄」二〇〇五年七月

ホームページ掲載：二〇二四年四月二三日

# 『仏頭は身』